

福岡市

金隈遺跡

第一次調査概報
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第7集



福岡市教育委員会

1970

発刊のことば

過去、現在、未来という歴史の流れに、我々は常に存在していると思います。現在にいる我々は過去を見つめ、現在という自分の立場を見つめ、未来を指向するものと考えられます。そのような観点に立てば過去の人々の動きは我々にとって常に興味あるところです。

埋蔵文化財のほとんどが、文字の存在しなかった有史以前の歴史であり、その歴史を鮮明にする方法は考古学的経験的成果を集中する以外にありません。

その結果を我々が学ぶことによって、二千年前の歴史に対する間隙を埋めることが出来るだろうと思います。

ここに二千年前の弥生時代に築かれたと思われる金隈遺跡を調査することによって、その間隙の一部を埋める史料を、市民の皆様に贈ることが出来れば幸いと思います。この月隈丘陵一帯は未だ考古学的学問のメスを加えられておらず、この調査によってこの地域の弥生時代の真実は開かれたのです。この遺跡の人々が我々に話しかける意味をこの金隈遺跡調査概報によつて少しでも市民の皆様が感じていただければ幸いと思います。

最後に調査時お世話をなった地主長沢茂喜氏、九州大学考古学研究室の教官、地元関係各位、更には就学中調査に参加していただいた学生のみなさまに対し、謝意を表します。

昭和45年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 豊島延治

発掘調査関係者

調査関係者 鏡山猛 渡多野院三 岡崎敬 永井昌文 森貞次郎 佐野一 小田富士雄
 佐藤伸二 高倉洋彰 西健一郎 木村幾太郎 藤口健二 岩崎二郎
 松本肇 与小田寛 大石官 児治 平山修一 高木恭二 植谷孝徳 福井修
 安樂勉 肥山正秀 久原利彦 緒方勉 敷島安人 沢皇臣 横山邦継
 高木正文 山本征男 隈昭志 山北翼 清水真美 津田さなみ
 村上伸子 川島陽子 森繁郁子 中島信代 古賀定子 貞光朋子 富松博美
 阿部伸子 加藤康子 林輝子
 福岡高等学校生徒 嘉徳高等学校生徒 福岡女学院生徒

地元協力者 八尋歎 長沢茂喜 秋根卯之吉 小方寅太 鷹野武夫 白垣勇 大塚弘
 平井スミ 春日栄 長沼すず子 春日やすの 進藤吉子 白川サ子
 白垣百代 関加代子 浜地房江
 月隈公民館 月隈小学校

福岡市教育委員会 豊島延治 大藏富繁 青木崇 三島格 清水義彦 野上淳次 石原博
 田中道夫 下条信行 山口俊二 尾畠美恵子 中島三枝子 徳重知也
 今宮祐美 岡部美代子 柳田純孝 塩屋勝利 折尾学（調査責任者）

福岡市金限造跡調査報告書第7集

誤字訂正表

頁	行数	誤字	訂正
14	回式	K 78 → K25	K 78 ← K25
19	17	K 15・K13より新しい	K 61・K13より新しい
20	5	K 73より古いK44より新しい	K 73より新しくK44より古い
第38回 (付録)	A-3区	K 89	K 83
"	A-4区	K 90	K 70
第38回 (付録)	A-3区	K 80	K 90

発掘調査関係者名中、下記を脱落いたしました。謹しんでお詫びいたします。

橋口達也

目 次

I 立地条件と環境	3
II 調査にいたるまで	3
III 調査経過	5
IV 遺構の概要	6
1. 壕棺墓（その先後関係を中心に）	6
2. 土 坡 墓	21
V 出土せる人骨について	26
VI 本遺跡の問題点	30

例 言

1. 本報告書は国および県の補助を受けて福岡市が調査を行なった、金隈遺跡の調査概要である。
2. 本遺跡の調査概報を「福岡市埋蔵文化財調査報告書」第7集とし、既刊分に次のごとくナンバーを付す。

第1集 福岡市有田古代遺跡発掘調査概報（1967年）

第2集 有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告（1968年）

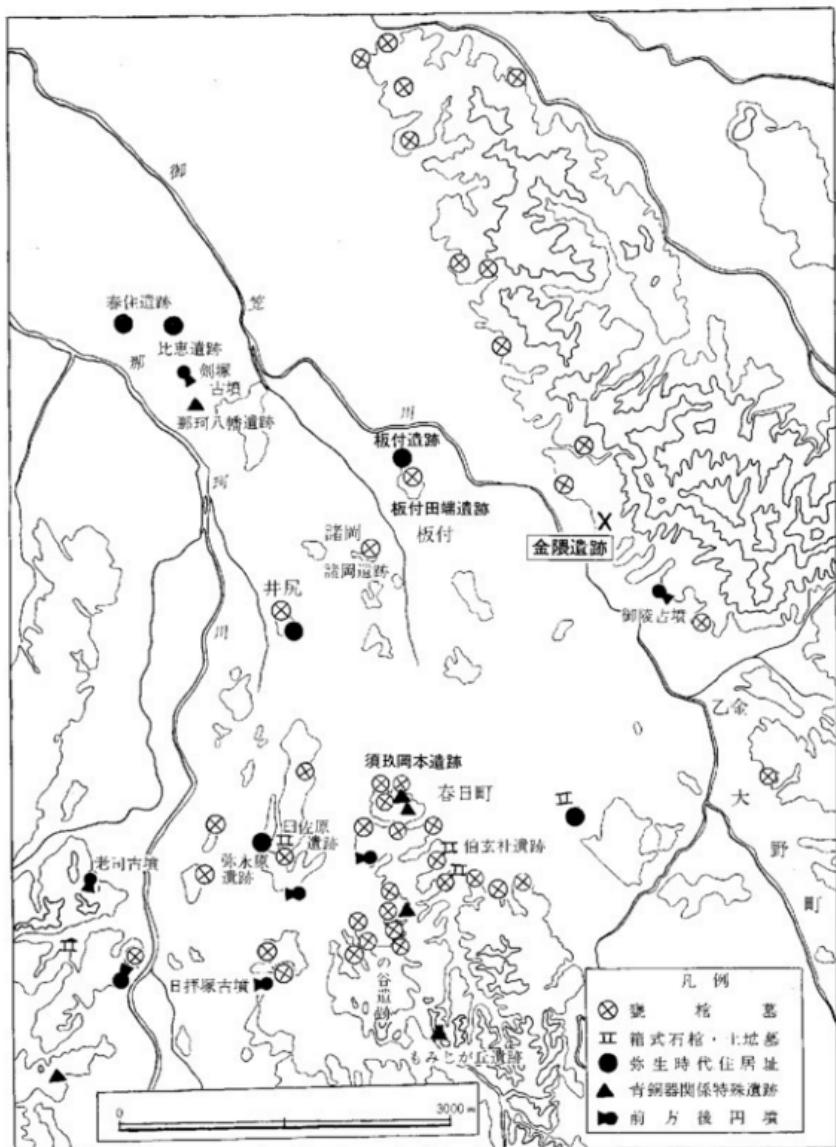
第3集 福岡市生の松原元寇防塁発掘調査概報（1968年）

第4集 福岡市今津元寇防塁発掘調査概報（1969年）

第5集 福岡市老司古墳調査概報（1969年）

第6集 福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集（1969年）

3. 本遺跡概報の図面のトレース、並びに個別遺物の作図は折尾がおこなった。
4. 本遺跡概報の執筆はIIの項を柳田純孝、Vの項を永井昌文、その他の項は折尾学がおこなった。
5. 「IV 遺構の概要 1. 壕棺墓」の項で図面は全て平面図にとどめ、かつ遺構配置図と出土の個別遺物図も次回にゆずった。
6. 発掘区D-01～D-04まではプラン図を作成して埋め戻した。この区の詳細は次回に報告する。



第1図 金隈遺跡と周辺の遺跡（塙屋勝利による）

I 立地条件と環境

福岡市の南東部の背後には三郡山系があって、それから派出した山塊が四王寺(410m)の山塊として認められる。四王寺の山塊はその山麓に、月隈丘陵(100m~150m)をつくっている。

福岡市の中央東には御笠川がある、四王寺山塊、月隈丘陵の西斜面の流れと市外の春日丘陵の西斜面の流れとを集めて西北流して、博多湾に注いでいる。この川は中、下流部にやや広い堆積平野をつくり、福岡平野の一部分を形成しており、この平野部で、多少屈曲、蛇行して、数段の段丘をつくっている。⁽¹⁾

本遺跡は御笠川と平行してつくられた月隈丘陵の南、市中央より言えば南東隅、標高30m前後の地点に存在している。

御笠川を挟んで本遺跡から西約2kmには弥生式時代前期を代表する板付遺跡⁽²⁾があり、また南西約3kmには各種青銅器を内蔵するところから弥生式時代中期にその全盛を迎えたと考えられている須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群⁽³⁾が存在している。

福岡市の中央東部にあって本遺跡を含む月隈丘陵一帯は考古学的には未だ夜明けを迎えた未開拓な地帯であり、僅かに市外筑紫郡大野町乙金に弥生式時代前期の墳墓を主体としたと思われる乙金遺跡⁽⁴⁾が分っているに過ぎない。

そのような意味において、御笠川流域に位置し、しかも日本稲作農耕の黎明を迎えた板付遺跡を軸として、弥生式時代の垂直的分布の拡大を緻密に把握しようとする考古学的姿勢を有するなら、本遺跡が筑紫郡春日丘陵に存在する須玖遺跡と対照した姿として、その存在意義はかなり貴重なものとして認められよう。

幸い、月隈丘陵一帯は過度の破壊を受けておらず、遺物散布地として、月隈、立花寺弥生式時代（土師式時代も含まれる）遺跡、東平尾弥生式時代（土師式時代も含まれる）遺跡等、発見され、将来の調査によって歴史的鮮明さを加えられつつある（第1図）。

参考文献

- (1) 日本建築学会九州支部、土質工学会九州支部「福岡市地盤図」1967年
- (2) 日本考古学会編「農耕文化の生成『板付遺跡』」1961年
- (3) 鳥居良喜、梅原末治「筑前須玖先史時代の研究」京都大学考古学研究報告1928年、森本六爾「筑前須玖の立石遺跡」日本考古学研究1961年、福岡県教育委員会「福岡県須玖、岡本遺跡調査概報」1963年、春日町教育委員会「一の谷遺跡」1969年、福岡県教育委員会「福岡県伯笠社遺跡調査概報」1966年
- (4) 渡辺正気、小田吉士雄「筑紫郡大野町発見の古式弥生式土器」九州考古学15、1962年
※ 塩屋勝利君の教示による。

II 調査にいたるまで

第一次予備調査

福岡市比恵で鉄工所を営む長沢茂喜氏は、福岡市大字金隈字日焼に器材倉庫、宅地用の土地を買入れ、昭和43年4月、用地への道路取り付け工事を行なった。工事中甕棺墓と人骨が発見され、市社会教育課へ連絡した。市教育委員会では4月25日文化財担当者を現地へ派遣し、緊急の記録保存につとめるところとなった。

遺跡は金隈地域の南端30mの低平な台地にあり、台地へのぼる道路を取付けるため、4m幅で1.0~1.5m削平したために、甕棺墓が出土したものである。

台地の東南は現在アドウ畑になっているが、終戦間近く、軍用飛行機を収納すべく台地を削平した際多数の喪棺墓と人骨が掘り出されたという。

4月25日(木) 長沢茂喜氏の連絡により清水、柳田、櫻口などが現地へ。標高30mの台地に南から西側斜面へ取り付けた道路の切り通しに喪棺墓が露出していた。これを一号喪棺墓とする。合口式の上部變形土器の突端部から下半が失なわれ、上部變形土器の口縁部、下部變形土器は岸面に残され、人骨は取り出されてあった。一号喪棺墓は切り通しの中間地点にあたり、ここから台地上との間の切り通し面には数基の變形土器と人骨が出土し、別な地点に一括されてあった。

4月26日(金) 台地は東から西へゆるく傾斜しながら平原へ接する。喪棺墓の分布は、一号のはかに東側崖面には地表から約1m下に3基の合口式喪棺墓が認められた。台地上の最も近い地点に1基、西側へのびるゆるい傾斜面にも1基確認され、道路工事中に発見された一括資料中には少なくとも4基以上の口縁部があり、合せて10基以上となり、傾斜面に密で台地一面への広がりをみせ、多数にのぼることが予想された。一号をはじめ、はとんどが弥生式時代中期中葉～後葉の大形喪棺墓で、切り通し面からは須玖式並行の舟彫り喪棺墓もあるが、副葬品はない。本日は九大考古学研究室の協力を得て一号喪棺墓の埋葬状態を調べるための排土作業、地表から1.5mの豊穴を掘り、その底部から台地の頂部へ横に下部變形土器を挿入する穴を掘り込んだもので、中期の大形變形土器を埋置する典型的な土坑である。午後九大医学部から永井昌文助教授が現地へこられ、一号人骨は成人女性、他の一休は熟年男性と教示された。

4月27日(土) 昨日につき一号の土坑に注意しながら掘り進むと東側に無蓋単式喪棺墓が現わされた。単式喪棺墓が先に埋置され、その土坑をカットして一号の變形土器が埋められた状態にある。

4月28日(日) 一号の実測。長軸の方位はN62°E、長軸の水平レベルに対し、下部變形土器の底部は上部變形土器の底部に対しやや下がる。夕刻鉄工所社員数名が取付け道路と台地端部の接点を土取り作業中、中期前半の小児用喪棺墓が出土した。本調査K10喪棺墓がこれである。中期前葉のものは少なく、中葉から後葉にかけて盛行した時期の喪棺墓地であろう。

台地の頂上部から西側傾斜面にかけてポーリングの結果、なお数基の變形土器があり、統計20基に近い喪棺墓の存在が知られた。精査すれば更に多くの出土が予想されたため、長沢氏の協力により、昭和44年度予算で調査するまで現状を維持されることになったのである。



第3図 作業風景

III 調査経過

予備調査で認めた遺物散布地の最も顕著なところを中心にはば南北に幅2m、長さ20mのトレチを設け、それを中心に東にそれぞれC、B、A列に5m平方のグリット、西にそれぞれE、Fのグリットを設定し、最初のトレチをDトレチとした。

まず、Dトレチの調査作業から進め、遺物のプライマリーな状態で散布の濃薄の度を見ることにしたのである。そのトレチにより、D-1区において土塙墓D13・D7、腰棺墓K20-K22・K28、D-2区においてK23-K27・K62、K78、K86、K27に伴うものと考えられる大中小の蓋形土器を、D-4区において土塙墓D3をそれぞれ検出した。

それら一連の腰棺墓、土塙墓を検出する過程において、層位を把握することと、墓域内封土と地山との色彩的相違に調査員相互の目を慣らすことに重点があったわけだが、D-1～D-4区までの土層の流れをみると、D-1～D-3区までの層序は表土から花崗岩風化土壤の地山まで間層を置かず、D-4区になって表土と地山の花崗岩バイラン土壤との間に暗褐色土層を認めるにしか過ぎない。然るに、墓塙を浅く構えたK20～K25はその姿の殆んどを何らかの機会にカットされ、合口式か単独に埋葬されているかも分らず、また墓塙のプランすら確認出来ない状態であった。

Dトレチの調査作業の後、順次高い方から低い方へ即ち各グリットの1系列から南の発掘区へと作業を進めた。

更に、この弥生式時代腰棺墓を主体とする共同墓地の墓域を知る上において、また、将来この遺跡の性格把握調査を行う意味において、Dトレチを更に延ばし、Dトレチ、D-1区の北側の区をD-01区として更に北に進むに従ってD-04区までとした。

それらの作業の結果として、腰棺墓108基（内12基は昭和43年確認）、土塙墓16基、石棺墓2基、支石墓らしきもの2基？を最終的に検出、確認した。

なお、腰棺墓32基、土塙墓2基、石棺墓2基（1基はF-1区腰棺墓K13の北1.5m、1基はD-03区腰棺墓K56のすぐ東側に平行）、支石墓らしきものについては、平面プラン図を執るのみにて日数の制限上未調査のまゝ埋め戻して来たが、再調査の機会を得たい（第39図）。



第4図 墓 棺 墓 出 土 状 態

IV 遺構の概要

1 墓 棺 墓（その先後関係を中心にして）

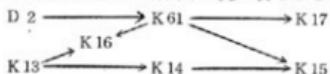
第5図について説明する。

墓 棺 墓 K13 (Kは墓 棺 墓を意味する。以下墓 棺 墓ということわりを省く)。

K13は隅丸長方形の墓壇を設け、下部菱形土器埋設部分に横穴を穿ち、設置され、下部菱形土器と上部鉢形土器との接合部分を粘土で密閉されて設置されている。これと同様の埋設方法がとられているのはK14・K15・K61である。K16は明確なる墓壇枠は確認出来ないがその西側面は若干ではあるが認められ、底部はわずかに穿たれた横穴に挿入されており、表土から浅い部分に埋設されている関係もあって口縁部から胴部の一部分はカットされている。K17はそのほとんどをカットされ圓に示した墓壇線もプライマリーな状態とは考えられない。K16・K17は単棺であり小児用に使用されたと考えられる。各墓 棺 墓の方々、傾斜は後に示す一覧表を参照されたい。

土 塚 墓 D2は横巾70cm、縦巾150cm、深さ90cm、底部近くで極端に細くなっている。D2はK61の底部によってその側壁の一部を突き破られているところからK61より古式と考えねばなるまい。

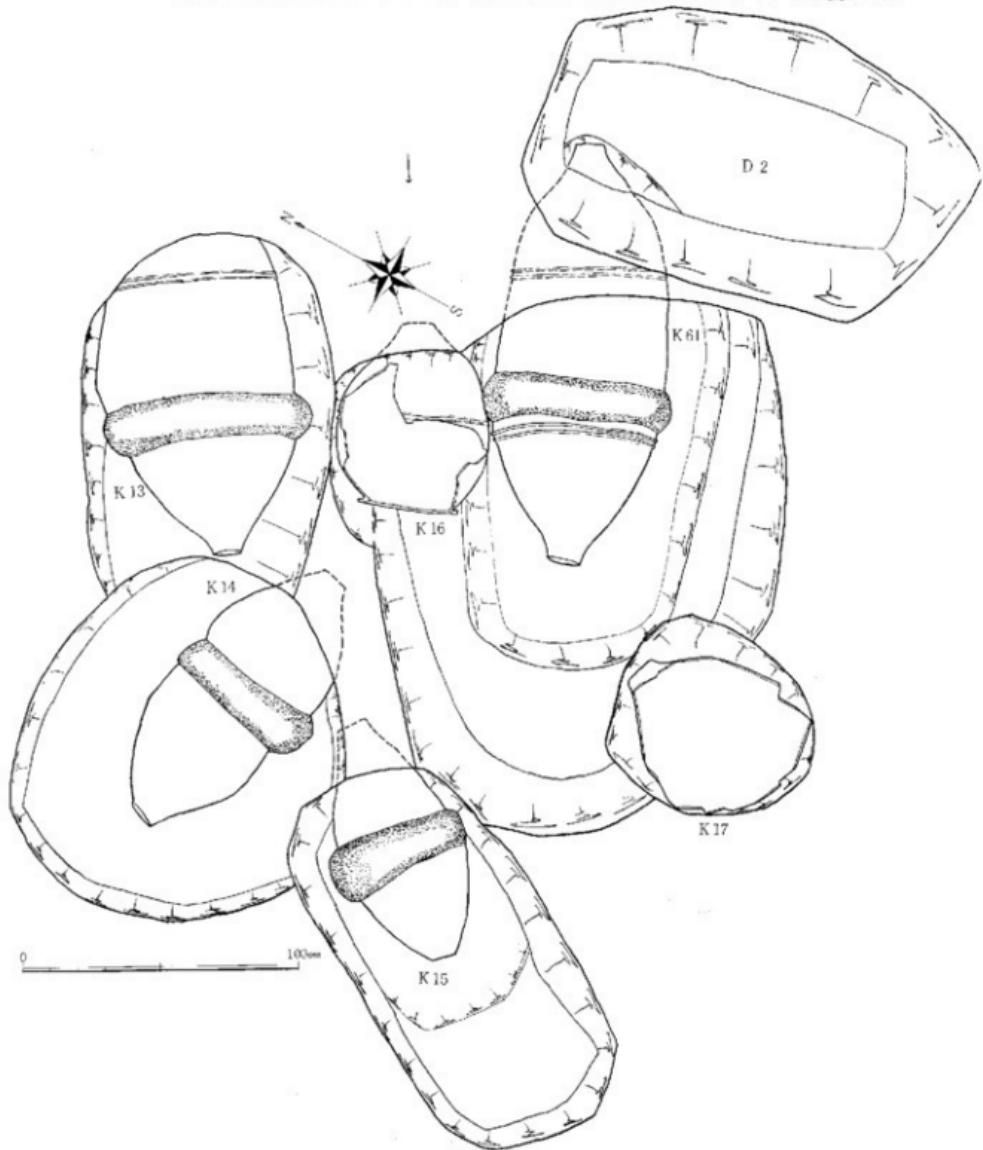
各墓 棺 墓の先後関係を記せば次のようになる。K13はK14の墓壇によって切られ、K14はK15によって切られ、K15は同様にK61の墓壇を切っている。K16はK13・K61の上層に位置してK13・K16の墓壇を切り込み、K17はK16と同様、K61を切っている。それら一連の墓 棺 墓相互の新旧の関係を記せば（矢印の先が新しさを示す）

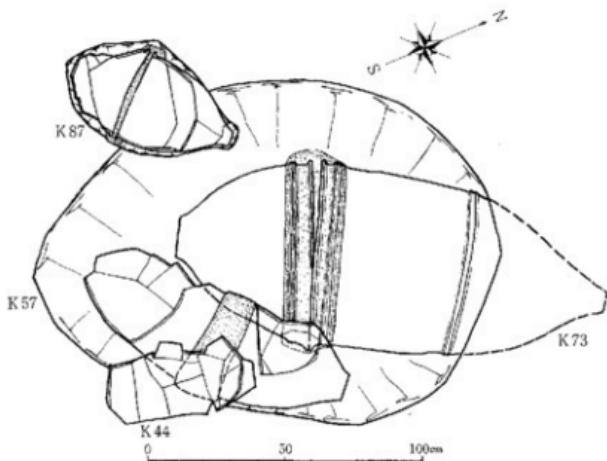


となる（第5図と併せて第4図参照）

第6図について説明する。

K73は椭円形状に墓壇を設け、下部變形土器の胴下半部を挿入する規模の横穴を穿ち、鉢形土器と變形土器との合口の形式を呈し、上部鉢形土器と下部變形土器の接合部を粘土で密閉して埋置された腰棺墓である。K57はK73より上層に位置し、K73の墓壇を半ば利用し乍ら、下部變形土器





第6図 出土状態実測図

と上部變形土器との接合部を粘土で密閉して埋置された合口式變棺墓である。K44はK57の上層に在って、K73の墓塙縁を切りこみ、埋置された變棺墓で、表土より浅いところに存在していることも手伝って、その大部分は消滅寸前に追いつまれており、それが合口式であるかどうかは分らない。

K87とK73の墓塙を切り埋置され、上部變形土器と下部變形土器との接合部の粘土をかすかに残存せしめている合口式變棺墓である。

それら一連の變棺墓相互の新旧関係は次のようになる。（矢印の方向は新しさを示す）。



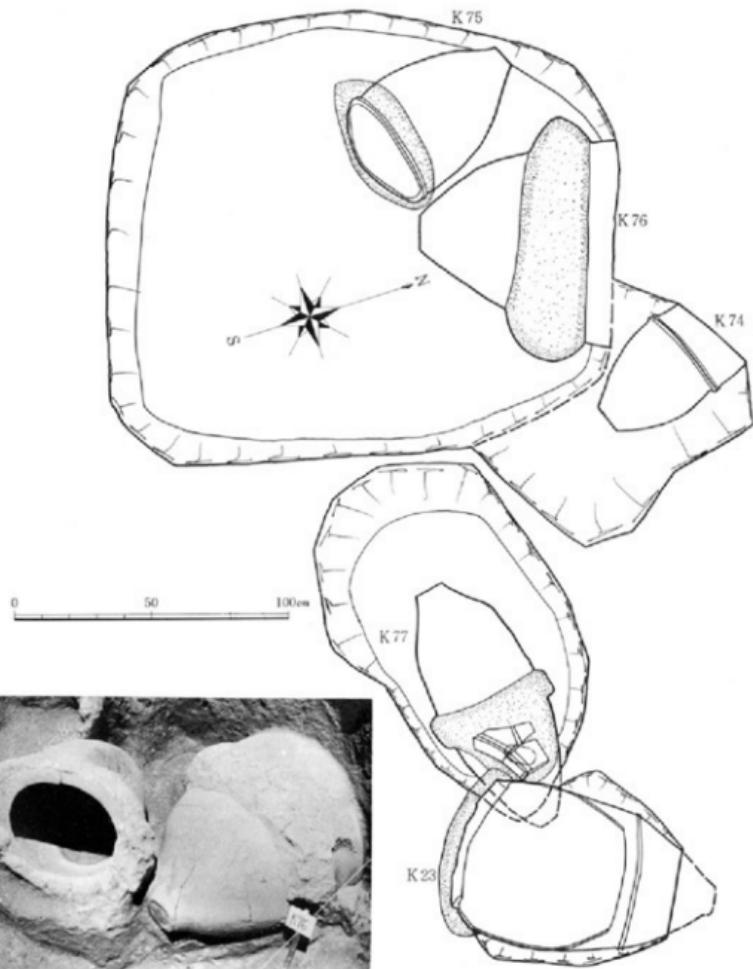
方位、傾斜は後に示す一覧表を参照されたい。

第7図について説明する。

K76は隅丸方形の墓塙を竪穴状に掘り、下部變形土器の下半部分を挿入し得るだけの横穴を穿ち、その後、安置され、下部變形土器と上部鉢形土器との接合部分を粘土で密閉された合口式變棺墓である。K75はK76の安置の後、何らかの時間差を持ち乍ら埋置された単式變棺墓でその口縁から頸部にかけて粘土帯が一周し乍ら走っている。この變棺の場合、最も問題となるのは、単独に存在した變棺の蓋にいかなるものを使用したかということであろう。その變形土器の口唇部から口縁部にかけてタール状の斑点が約2間にかけて認められる。恐らく2千年の年霜にその存在するらどめることの出来なかつた木板を使用したのではないかと考えられる。K74はK76より高位置に長方形の墓塙を竪穴状に掘りこみ、下部變形土器の胴部下半を挿入し得るだけの横穴を穿ち設けられた變棺墓で、図によると上部變形土器と下部變形土器との接合部に粘土帯が、恰も無いような印象を与えるが、その存在は作図以前に認められており、又本變棺墓はK76の高位置にあり乍らも幸い、墓塙プランを確める段階でK76の上にその墓塙の一部がかかっていることが確認されている。

K77は長楕円形の墓塙を竪穴に掘りこみ更に下部變形土器の一部を横穴に挿入された變棺墓で上部變形土器の口縁から下部變形土器の胴部にいたるまでかなり厚く巾の広い粘土帯を施され、

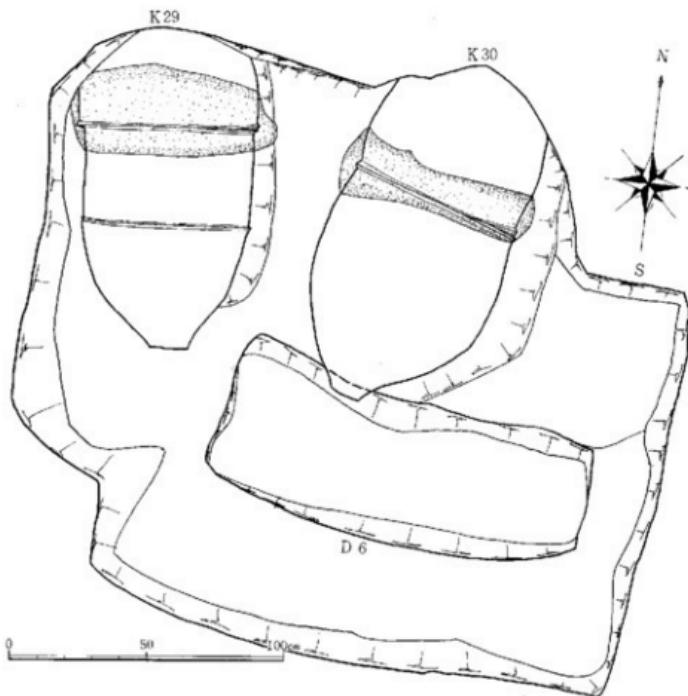
第7図 出土状態実測図



第9図 墓棺出土状態
(K75とK76の関係)

第10図
K77出土状態





第11図 出土状態実測図

下部變形土器の胴部には補修具として土器の口縁が被せられている。甕棺墓はその型式から弥生時代中期中葉に比定され、補修具は中期後葉に比定される土器である。K23はその位置が表土から浅く胴部から口縁部にかけてその大半を失っている甕棺墓で口縁部分には粘土帯の施しがあったと考えられる。単式甕棺墓か合口式かはカットされていて何とも言い難い。K23はK77の高位置にあり、明らかにK77より新しい。

今まで述べてきた結果としてその新旧の関係を記せば（矢印の方向が新しさを示す）

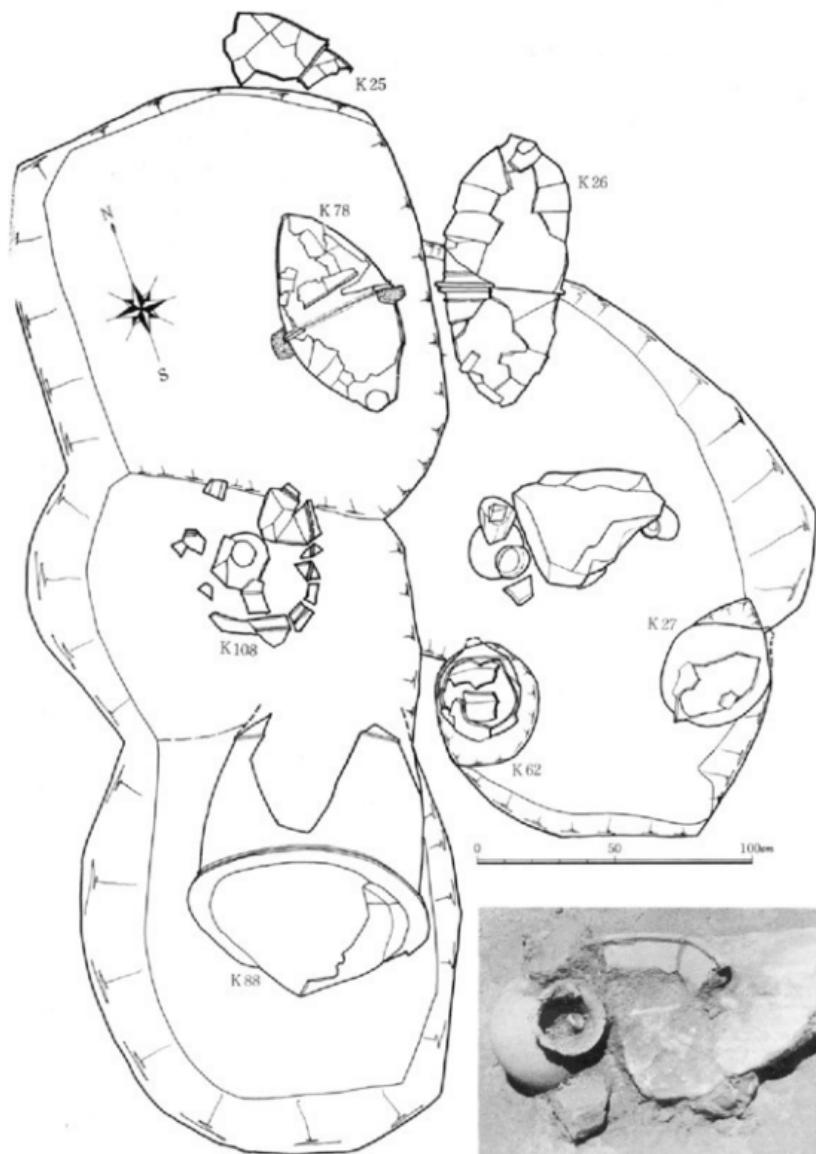


となる（第9・10図も併せて参照）

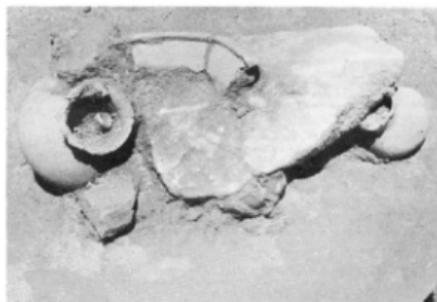
第11図について説明する。

K29・K30はその墓壇を平面に把えた場合同じ色相を呈しその区別の判断はしかねる状態で共に一定の深さに竪穴を窪め下部變形土器を挿入する意味において横穴を穿ち、埋置された甕棺墓で共に下部と上部變形土器の接合部を粘土帯で密閉している。

D6はK30にその側壁上部を切り取られている状態で検出され、その南側壁の部分と小口駆に多量の木炭が付着した状態を呈していた。更に付言すべきはその木炭が底底まで延びているという事実である。これらの点を考えるにD6は木棺墓の可能性を秘めているといわねばなるまい。



第12図 出土状態実測図



第13図 K27 副葬品



第14図 遺構遠景

これら一連の各遺構の新旧関係は次のとおりである。(矢印は新しさを示す)。

D6 → K30

K29

第12図について説明する。

K27は壺形土器を使用し、その底部を若干地山に挿入された単式壺棺墓で、その墓拡範囲は巨石を伴う一括土器を含むと考えられる。それら壺棺墓と一括土器の類似点は頭部がほぼ直立する形をとり、頭部と胴部との接合部に一条の断面三角形の突帯を施してあるところにあり、一括土器は壺棺に伴う副葬品と考えられよう。

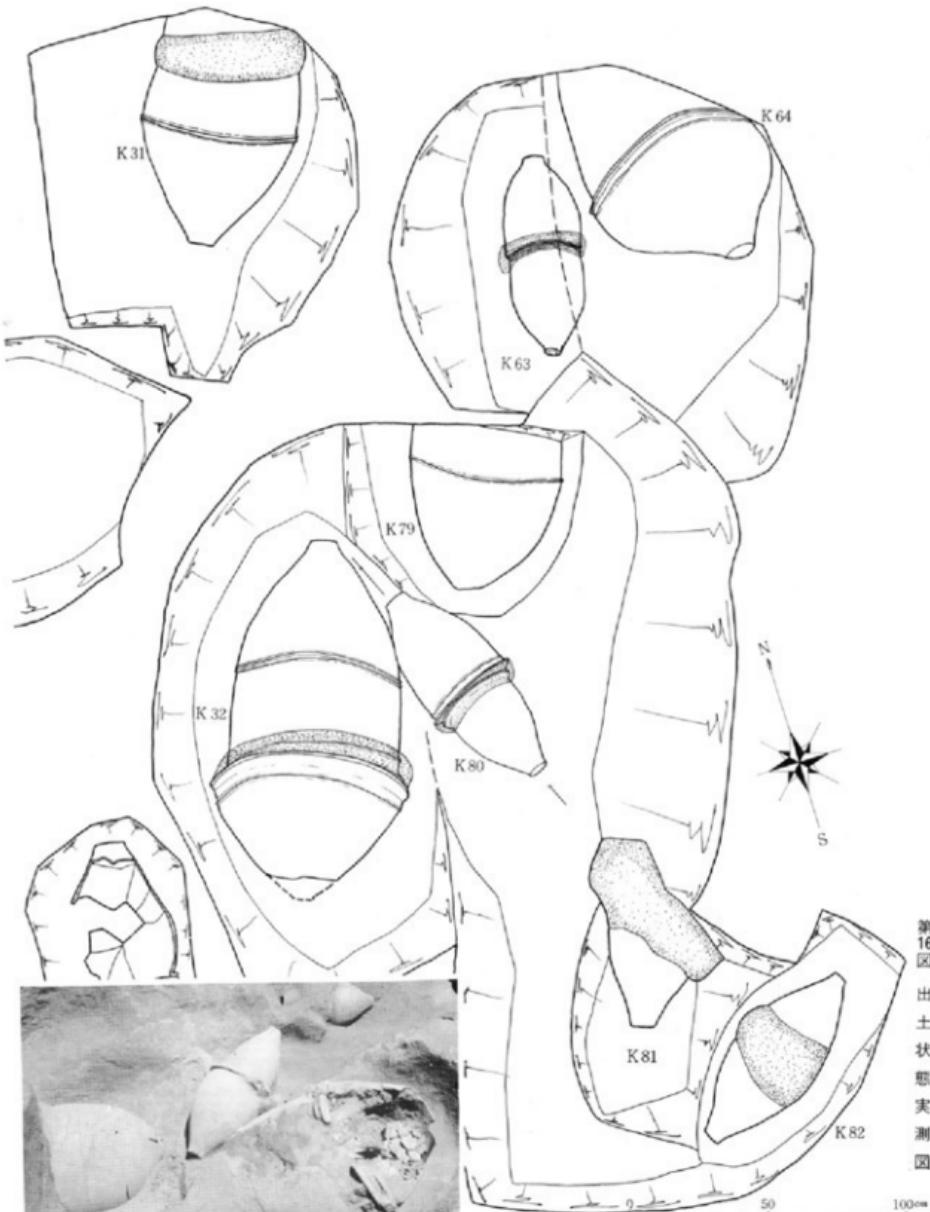
又一括土器と巨石の埋置状態であるが、最初に粘土を敷きつめ、その上に大・中・小の小形壺形土器を置き、その上に巨石を何らかの形で密着させ乍ら置かれている。ここで問題になるのは巨石の意味を考える上において、それが立てられていたか否かにある。一括土器の三個の内、一番小さな壺形土器は完全に巨石によって破損を受け他の大・中の小形壺形土器もその口縁部に僅か乍らの破損を蒙っている。その事実は巨石が当初立てられた標識として存在し、何らかの衝撃に耐えられずして倒された状態を現在呈しているのではないかと考える。幸い、島根県古浦遺跡⁽¹⁾鹿児島県鳥ヶ峯遺跡⁽²⁾等の調査例は先述の結論を助けている(一括土器と壺棺墓は後の出土遺物実測図に載せている、併せて第13図参照)、K27を内抱する墓址はK26・K62・K108の墓址によって切りこまれている。

K26は合口式小児用壺棺墓で地山とそれとの間に層を堆積させており、表土から浅い部分に埋置されている関係もあって、その墓址は確認するに及ばなかった。

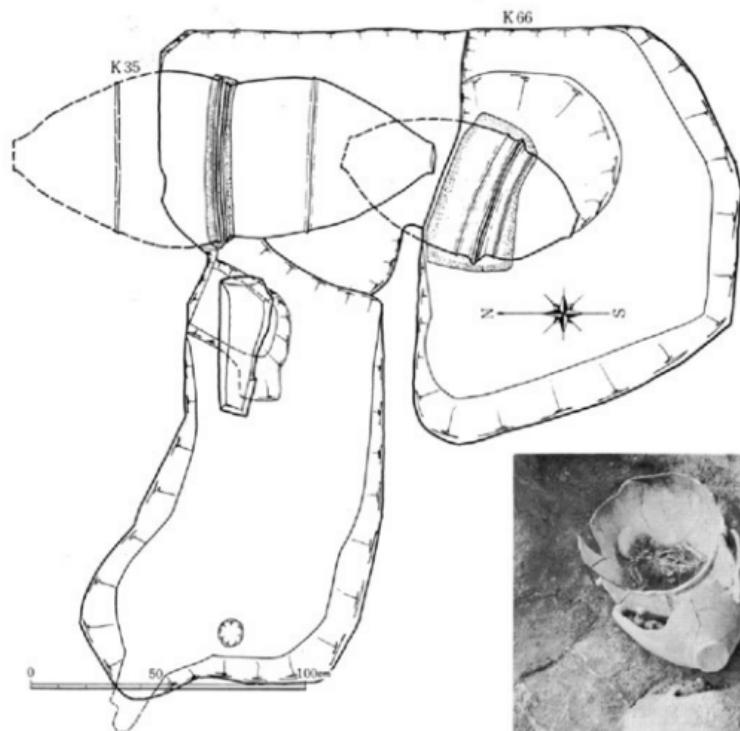
K62はほぼ円形の墓址を構え、下部壺形土器の底部が僅少なりとも挿入出来る横穴を穿がたれ埋置された上部壺形土器と下部壺形土器とを合せた合口式壺棺墓で、両者とも全面丹に彩られている。

K78はK25とK108によってその墓址を切りこまれ、上半部を破損された合口式小児用壺形土

第16図 出土状態実測図



◀ 第15図 出土状態

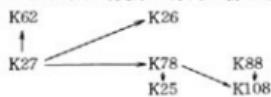


第17図 出土状態実測図

器で、僅ながら粘土帯の施しが在ったことを示している。

K88はかなりの傾斜をもって埋置された合口式成人用櫛棺墓で、K108の底部に位置している。そのことはK108によって切られていることを示す。

以上の結果、それら一連の櫛棺墓の新旧の関係を示せば次のとおりである（矢印の方向は新しさを示す）。



参考文献

- (1) 藤田等「『埋葬』図7」日本の考古学「弥生時代」所収
※ 三島裕氏の御教示による。

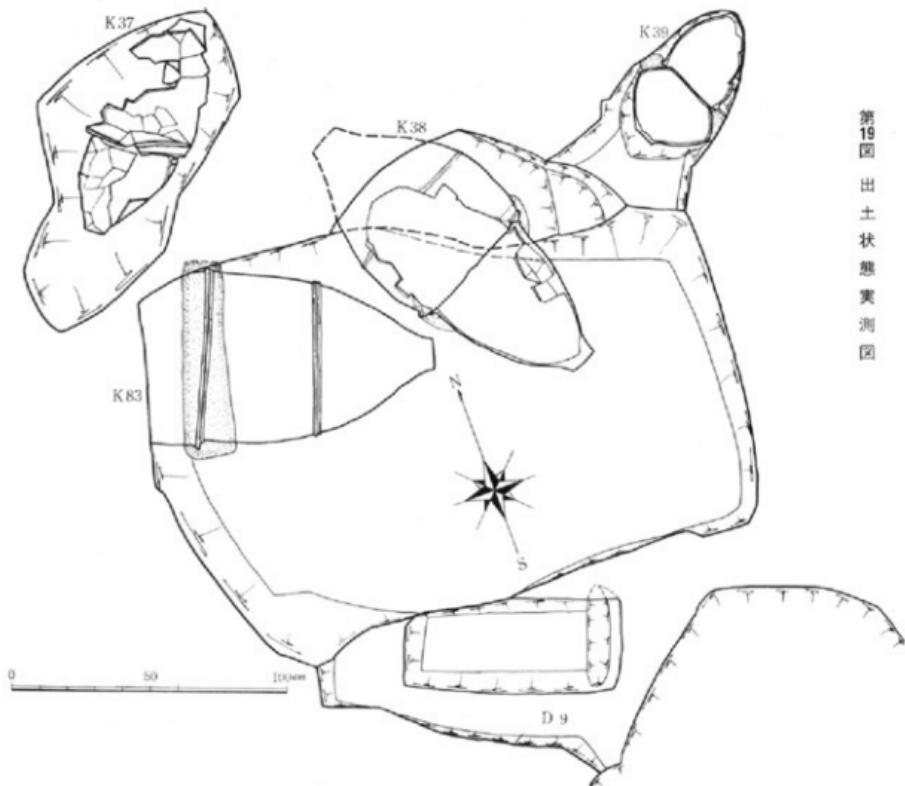
第16図について説明する。

K64-K69-K81は共に横穴挿入の墓塚をもつ櫛棺墓で、上部と下部の接合部を粘土帯で被われている。その他のK32-K63-K80-K82はいずれも竪穴のみにて墓塚を構え、上部と下部の接合部を粘土帯で被われている合口式櫛棺墓である。



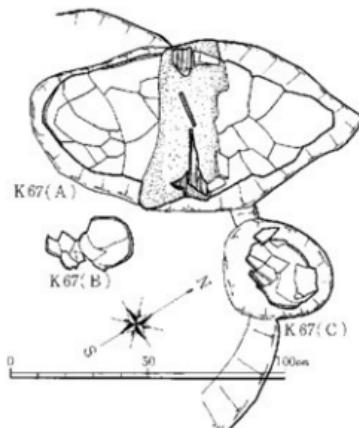
第18図 K66出土状態

第19図 出土状態実測図



第20図 出土状態





第21図 出土状態実測図

第17図について説明する。

K66は一定の豎穴を墓底として設け、更に下部彫形土器の一部を横穴に挿入された、上部鉢形土器との接合による合口式謗棺墓でその接合部分は広く厚く粘土によって密閉されている。

K35は同じく豎穴と横穴を混合した墓底を設けた合口式謗棺墓で、その接合部は粘土によって密閉されて、更に上部彫形土器はK66の下部彫形土器の直上にあってその墓底の一部を破壊している。

以上の結果を総括して、それら謗棺墓の新旧はK66 → K35へと辿られる。

第19・20図について説明する。

K83は長方形状の豎穴を掘り下げ、一定の横穴をその豎穴の壁に穿ち挿入され、上下部彫形土器を接合した合口式謗棺墓で、その接合部には粘土の施しがある。K83はD9の掘り方の部分を切り込み、更にK39の墓底の一部分を切り込んでいる。

K39はその上部を削割された、上部彫形土器と下部彫形土器を接合した小児用合口式謗棺墓での接合部に僅か乍ら粘土を残存している。

K38はその豎穴に掘られた墓底の規模は分らないが、その豎穴の壁に横穴を穿ち、挿入された、上・下部彫形土器を接合した合口式謗棺墓で、K39・K83の墓底をそれぞれ切っている。

D9は一定の長方形の墓底を掘り窪め、更にその中央部に被葬者を埋葬したと考えられる土塚を長方形に掘り空めている。更にその土塚の東小口部分には巾10cm、深さ4~5cmの掘り込みを有している。その事実は木板をその小口部分にあてた事を類推させる。

以上の七塚墓、謗棺墓の先後新旧関係は次のとおりである(矢印の方向は新しさを示す)。



第21図について説明する。

K67(A)は楕円形の墓底を更にこの謗棺墓を設置するだけの掘り込みをもち、それに上・下部彫形土器を接合した合口式謗棺墓で、その接合部は粘土帶で被われている。

K67(B)はK67(A)の副葬品であることがその出土状態から考えられる。

K67(C)はK67(A)の墓底を切り込んで埋葬された謗棺墓で、その殆んどを失っているため、単式か合口式か判断しかねる。

先述の結果、新旧の関係は次のとおりである。

$$\text{K67(A)} \longrightarrow \text{K67(C)} \quad | \quad \text{K67(B)} \text{は K67(A)の副葬品。}$$

第22・23図について説明する。

K68は長方形の墓底を設け、その壁に横穴を穿ち、上・下部彫形土器を接合した合口式謗棺墓で、

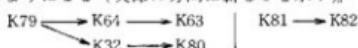
それら一連の謗棺墓の新旧関係に問題を移すと、3つのグループにおいてその関係が把握される。

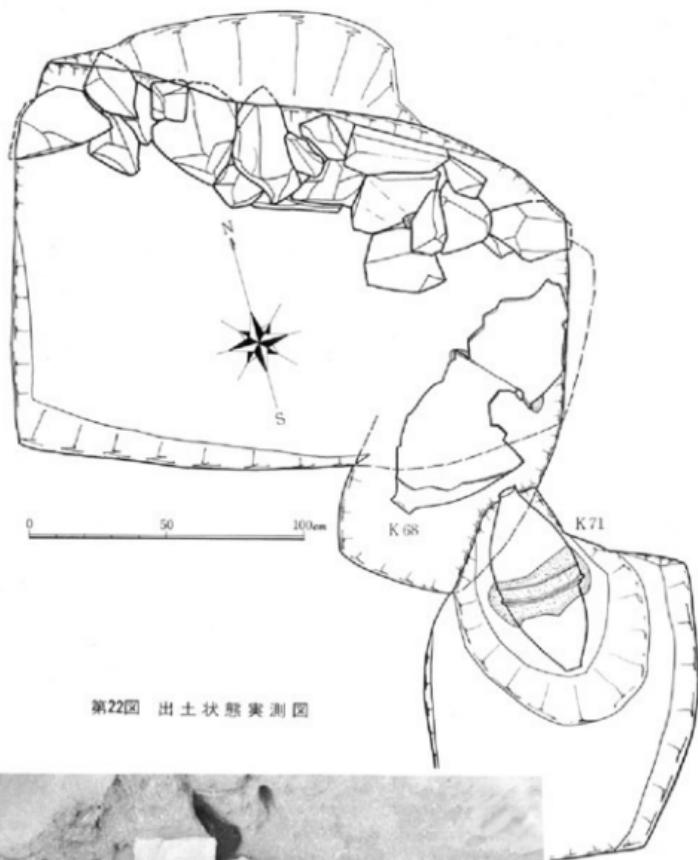
K79・K63・K64の関係は、墓底を平面的に把握する時点においてK79の墓底をK64が切っている状態が認められ、K64・K63の関係はK64の墓底をあたかも傷つけないようにK63は埋置されていた。しかしに古い方からK79・K64・K63へとその関係は進んでいる。

K79・K80・K32の関係はK79の墓底をK32の墓底が切り込み、K80はK32の墓底線上に存在している。それらの関係は古い方からK79・K32・K80へと時間的差をもって変遷する(第15図参照)。

K81・K82の関係はK81の長方形状墓底をK82の同じく長方形状の墓底が切っている。

それら一連の謗棺墓の時間的変遷を辿ると次のようになる(矢印の方向は新しさを示す)。

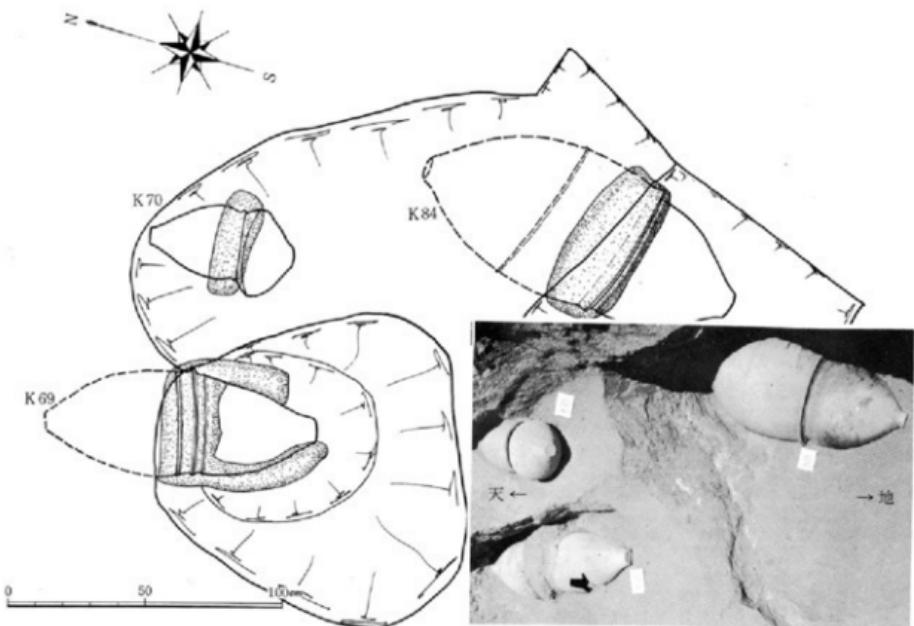




第22図 出土状態実測図



第23図 出土状態



第24図 出土状態実測図



第25図 出土状態

その接合部に僅少乍ら粘土を残存せしめている。

K71は長方形の墓壙を構え、更に本体を設置するだけの掘り込みを設け、更に下部壺形土器を挿入し得るだけの横穴を設け、埋置され、上・下部壺形土器を接合した合口式壺棺墓で、付け加えるべきは、横穴を築く際、K68の墓壙をカットしていることである。

特殊積石遺構について、その土壙はほぼ長方形プランを呈し、深さは約1m~1.2m位で、その土壙の北壁一杯に大少の礫を積み上げられて築かれている。又、本遺構はD10・K68をそれぞれカットし乍ら構築されている。この遺構を解明する材料は全く手元になく、先学諸兄の御教示を仰げれば幸いである。なお、石積みの高さは一様ではないが、塚底から、約70cm位である。

以上、結果をまとめて、その先後関係を述れば次のようになる（矢印の方向は新しきを示す）。



第24図について説明する。

K20は墓壙の規模は分らないが、かなり広範な墓壙を設け、上部壺形土器（口縁部打ち欠き）と下部壺形土器とを接合した合口式壺棺墓で、接合部分に粘土帯を廻し密閉されている。

K69は橢円形の墓壙を構え、本体を設置するだけの掘り込みを設け、更にその墓壙の壁に下部壺形土器を挿入するだけの横穴を穿ち、埋置され、上・下部壺形土器を接合した合口式壺棺墓でその接合部から脇部にかけて、広く厚くコの字状に粘土を張り巡らしている。なお、この壺棺墓はK70の墓壙を切り込んでいる。

K84は橢丸方形状（この墓壙の東側と北側の部分は完全に調査し得なかった）の墓壙を設け、その墓壙に横穴を穿ち、埋置され、上・下部壺形土器からなる合口式壺棺墓である。一瞥を加うるなら、成人用に思えるが、後で水井が記すように小児の被葬者を埋葬している。

以上を結果的に先後関係を見るなら

K70→K69 | K84
となる。

金限遺跡出土甕棺一覧表

番号	形態	年令	上部	下部	方位	傾斜	粘土帯	備考
1	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N 62° E	8°		未調査
2	合口式							〃
3								〃
4								〃
5	合口式	成人用					有	〃
6								〃
7								〃
8								〃
9								〃
10	合口式	(小児用)	甕形土器	甕形土器	N 22° E	-6°	有	
11								未調査
12	単式(?)	小児用		甕形土器	N 30° W	15.5°		
13	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 54° E	9°	有	K14より古い
14	合口式	小児用	甕形土器	"	N 79° W	1°	〃	K15より古い
15	挿入式	小児用	"	"	N 40° E	4°	〃	上甕口縁打欠
16	単式	小児用		"	N 67° E	15°		K15、K13より新しい
17	単式	小児用		"	N 17° E	不明	不明	
18	単式(?)	小児用		甕形土器(?)	不	明	不明	内部に粘土、溝に切られる
19	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 58° W	8°	有	
20	単式(?)	成人用		"	N 26° E	12°	〃	
21	合口式	(小児用)	甕形土器	甕形土器	N 76° W	不明		
22		(成人用)	不	明	不	明		部分的に個体とみとめる
23	単式	成人用		甕形土器	N 30° E	29°	有	K77より新しい
24	単式	小児用		"	N 70° E	14°		
25	合口式	小児用	甕形土器	"	N 86° W	33°		K78より古い
26	合口式	小児用	"	"	N 25° E	2°	有	K27より新しい
27	単式	小児用		甕形土器	N 70° E	35°		一例土器は頭を剪断すると て伸びる。E6, K62らしい。
28	合口式	成人用		"	N 12° E			未調査
29	合口式	成人用	甕形土器	甕形土器	N 5° W		有	
30	合口式	成人用			N 20° E		〃	未調査 D9より新しい
31	合口式	成人用			N 30° E		〃	未調査
32	合口式	成人用	鉢形土器	甕形土器	N 15° E	22°	〃	K60より古い K79より新しい
33	合口式	小児用	甕形土器	"	N 20° E	5°	〃	
34	単式	成人用	"	"	N 70° W		〃	K89, K65より古い
35	合口式	成人用	甕形土器	"	N 35° E	3°	〃	K66より新しい
36	合口式	小児用	"	"	N 80° E	水平		
37	合口式	小児用	"	"	N 45° E	10°	有	
38	合口式	成人用	"	"	N 30° W	3.5°	〃	
39	合口式	小児用	甕形土器	"	N 60° E	4°	〃	
40	合口式	小児用	甕形土器	"	N 54° W	18°	〃	
41								欠番
42	合口式	小児用	甕形土器	甕形土器	N S	4°	有	D4より新しい
43	合口式	成人用	甕形土器	"	N 55° W	3°	有	
44	単式(?)	小児用	"	"	N 40° E	7°		K57より新しい
45	合口式	小児用	甕形土器	"	N 4° E	20°	有	
46		成人用			N 20° W			未調査
47	単式	成人用(?)		"	N S			未調査前期末?
48	合口式	成人用			N 70° E			未調査
49	単式	成人用			N 15° W			〃
50	単式	小児用		甕形土器	N S	13°		
51	単式	小児用		甕形土器	N 25° E	55°		頭部打ち欠き
52	合口式	小児用		"	N 5° E			未調査
53	合口式	小児用		"	N 15° E			〃

番号	形態	年令	上部	下部	方位	傾斜	粘土帶	備考
54	合口式	小児用			N 35° E	14°		未調査
55	合口式							〃
56	合口式	成人用						〃
57	合口式	小児用	変形土器	変形土器	N 31° E	-1°	有	K72より古い K44より新しい
58	合口式	小児用	"	"	N 5° E	-9°	有	
59	挿入式	小児用	変形土器	変形土器	N 48° E	-4°	有	上下とも口縁打欠
60	合口式	小児用			N 70° W	14.5°		丹塗り未調査
61	合口式	成人用	鉢形土器	変形土器	N 65° E	5°	有	上部口縁打欠 K16より古い、口縁を切る
62	合口式	小児用	変形土器	"	N 10° E	26°		K27より新しい、上とも口縁打欠
63	合口式	小児用	張形土器	"	N 10° E	17°	有	K64より新しい
64	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 20° W		有	K63より古く K70より新しい
65	合口式	成人用	變形土器	"	N 17° E	1°	有	K34より新しい
66	合口式	小児用	鉢形土器	"	N 22° E	水平	有	K35よりも古い
67	合口式	小児用	張形土器	"	N 31° E	-12°	有	変形より下部に切欠（腰窓） 底部削減？
68	合口式	小児用	"	"	N 52° E	-8°	有	K72より古い火候より古い
69	合口式	小児用	"	"	N 15° W	-6.5°	有	K70より新しい
70	合口式	小児用	変形土器	"	N 10° W	-2°	有	K69より古い
71	合口式	小児用	變形土器	"	N 6° W	25°	有	K68より新しい
72	合口式	成人用	"	"	N 1° E	8°	有	
73	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 32° E	10°	有	K7- K54- 44より古い
74	合口式	小児用			N 20° W		有	未調査 K76より新しい
75	単式	小児用	變形土器	"	N 20° W		有	K76より新しい
76	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 20° E			K75より古い
77	合口式	小児用	變形土器	"	N 80° W	2°	有	K23より古い
78	合口式	小児用	"	"	N 8° W	22°	有	上・下に舟底型
79	合口式	成人用	"	"	N 30° E		?	K87で底部カット 不調査
80	合口式	小児用	"	"	N 15° W	9°	有	K64より新しい
81	合口式	小児用	"	"	N 30° E			K82は古い 本調査
82	合口式	小児用	"	"	N 60° E		有	K81より新しい
83	合口式	成人用	"	"	N 70° W	-3°	有	K38ミラム C9、K63 L 9 船型？
84	合口式	小児用	"	"	N 10° E	-7°	有	
85	合口式	成人用	鉢形土器	"	N 49° W	1°	有	
86	合口式	小児用	變形土器	"	N 10° E	-5°	有	
87	合口式	小児用	"	"	N 48° E	8°	有	K73より新しい
88	合口式	成人用	"	"	N 25° E			K108よりも古い 不調査
89	合口式	成人用	"	"	N 24° W	水平	有	K34より新しい
90	合口式	小児用	"	"	N 34° E	-18°	有	
91	単式	成人用						区外
92	合口式	成人用						未調査
93	合口式	成人用	鉢形土器				有	〃
94	合口式	成人用	"					〃
95	合口式	小児用					有	近くから磨削石様 不調査
96	合口式	成人用					有	未調査
97	合口式	成人用						〃
98			變形土器					脱下部不明 未調査
99								未調査
100								〃
101								〃
102								〃
103								前期 未調査
104	合口式	小児用	變形土器	變形土器	N 34° E	5°	有	
105								未調査
106		小児用						〃
107								〃
108	単式	小児用	變形土器	不明	不明	不明	不明	K78、K80、K27より新しい



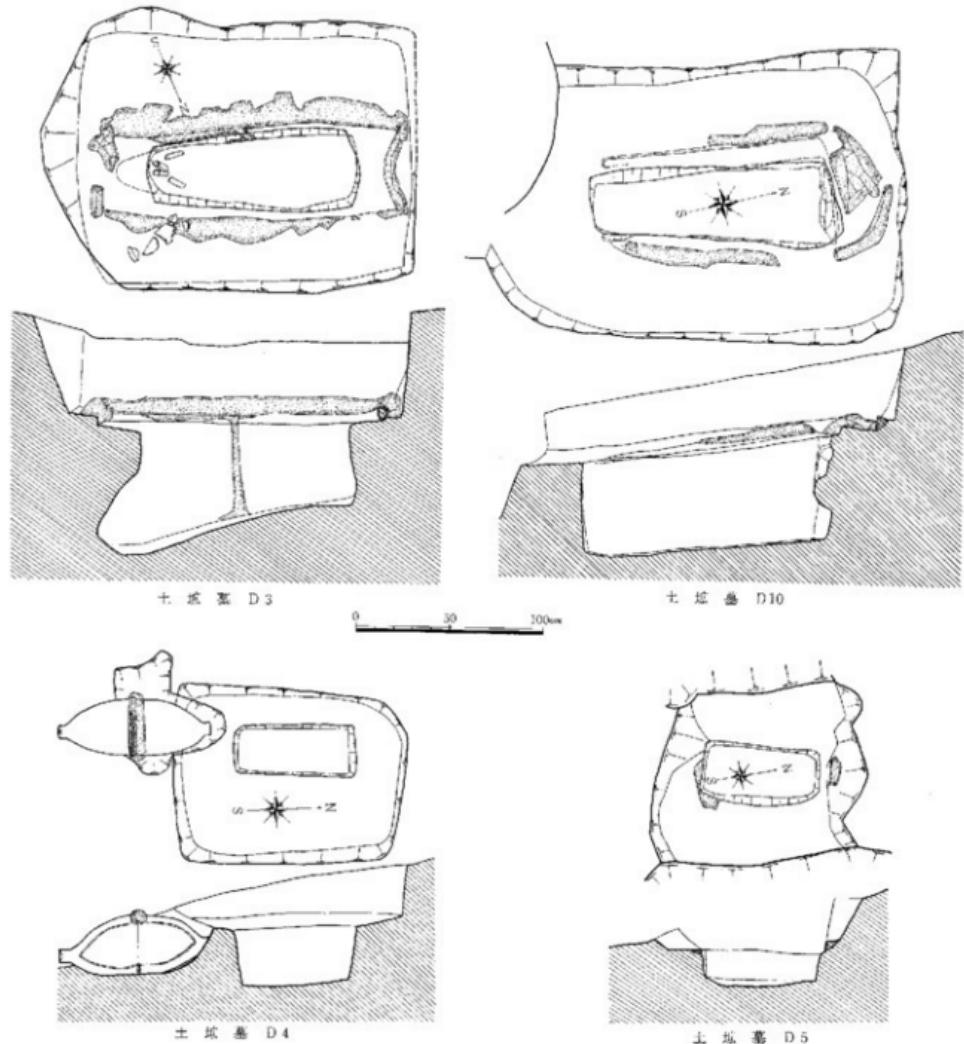
第26図 土 塚 墓 D3

2 土 塚 墓

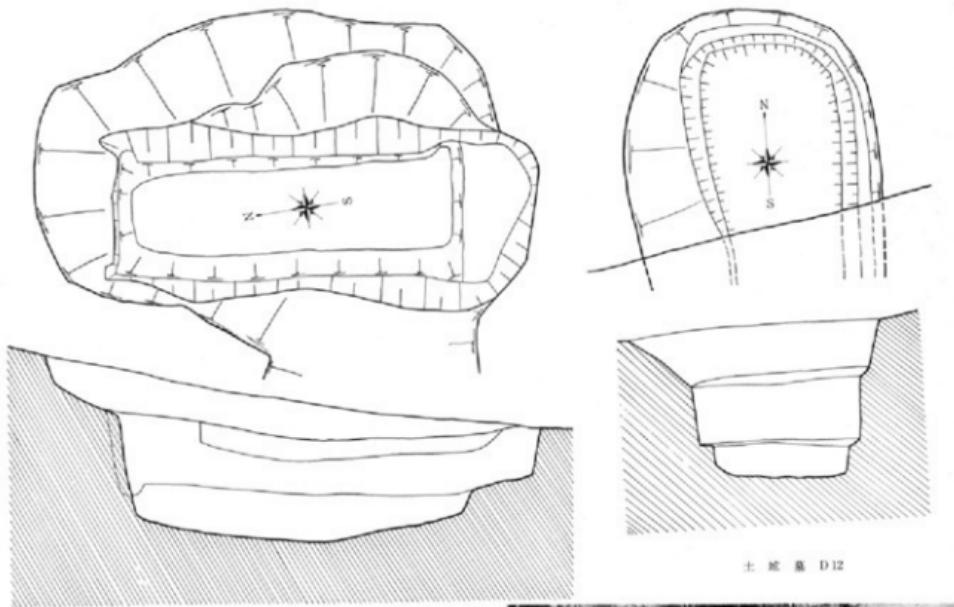
土塚墓とは死者を葬る為に、それ相応の穴を掘り、埋葬した墓を意味する。金隈遺跡において木棺墓の可能性を有している場合がほとんどであるが、一応土塚墓として取り上げ、その事實を認識するまでの経過を報告し、先学諸兄の御教示を得られれば幸いと考える。

金隈遺跡で発見の土塚墓は、大別すると三つの型が有り、その一つは大きく墓塙を長方形に構え、その中心に直接被葬者を埋葬する土塙を長方形に形造る場合（第27図）、他の一つは単に被葬者を葬るための土塙を構築し乍らも小口壁間に切りこみを有している場合（第28図）、更にもう一つの例は被葬者を葬る為の土塙を直接構え乍らも小口底部に掘りこみを有する場合（第30図）とである。

第27図の各土塚墓について説明を加える。土塚墓D3は長方形の墓塙プランを有しその中央に長方形の土塙を構築している。その土塙の塙底で狭くて深くなっている部分に、幸いにも成人用人骨膝の部分が曲げられた状態で検出され、巾広いところに頭部がくることを類推し得、然もその被葬者の体位が仰臥屈葬であることを暗示させる。その土塚墓の壁には僅か乍らも木炭を検出している。更に特筆すべきはその土塙と墓塙との中間の平坦部には土塙線に數cmの間隔を保ち乍ら、平行して粘土帯が敷きつめられていた。これらを総合して考える。炭化物の付着は側板の可能性について如何とも言い難いが、土塙に平行に走る粘土は木板を蓋として使用する際の目張りとして考えることを許している。その年代は、はっきり把握し得ぬが弥生時代前半期に比定される板付II式土器をその土塙封土に包含していた。以下土塚墓D4・D10・D5の詳細は省くが、土塚墓D4は斐棺墓K42によってその墓塙を切られている事を加えて置く。



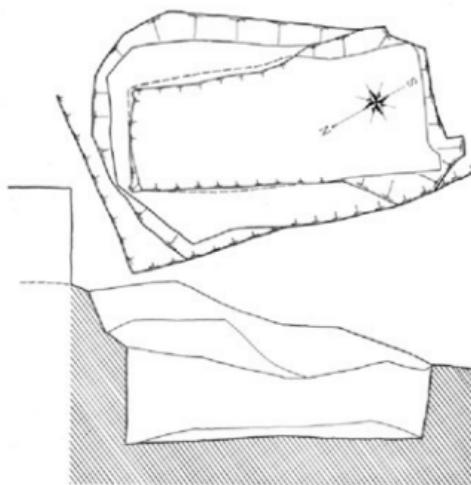
第27図 土 坑 墓 実 测 図



土 墓 D12

土 墓 D11

0 50 100m

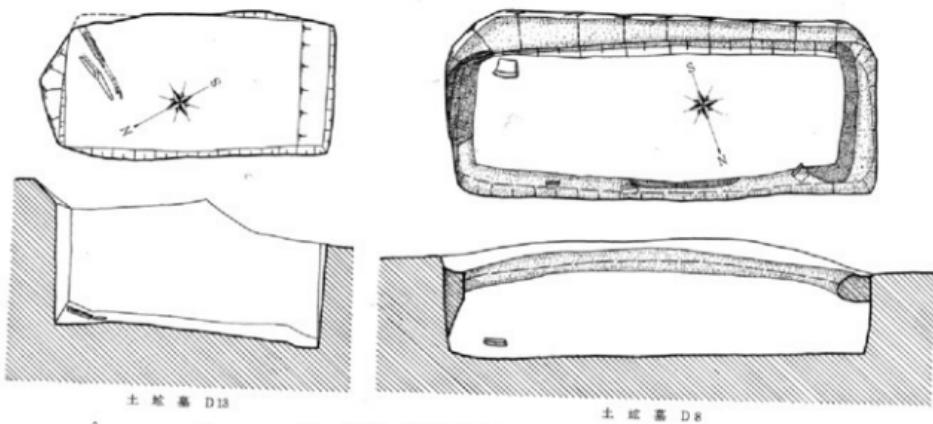


土 墓 D1

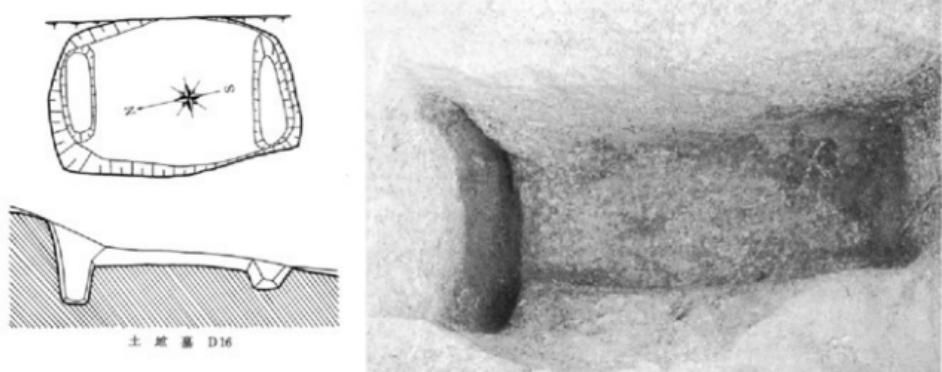
第28図 土 墓 実測図



第29図 土 墓 D1



第30図 土塙墓実測図



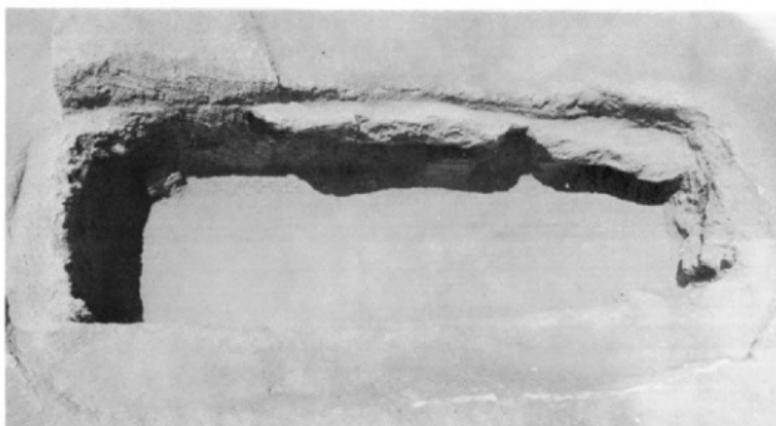
第31図 土塙墓 D9

第28図を説明する。

先述の例に比してこの図にあげた類型は広く構えられた墓壇を持たない。併し先の類型になかった小口隅を壁にそってほぼ垂直に走る幅数cmの溝が認められるところにある。その意味するところは土塙側壁に木板を使用したという痕跡として把握されよう。それを立証する事実として側壁に炭化物がかなり顕著に付着するを見る。そして又小口部分にも炭化物の付着している事実(D6)から小口部分にも木板を使用したと考えられる。又D12は土塙底部付近で幅数cmの段状部を有するが、その上部の壁に炭化物の付着を見るにつけ先述の木棺墓としての可能性を意味していると言えよう。

第30図のD13・D16について説明する。

先述の第28図の類型と比較して相違するところは、先例が小口壁隅を垂直に走る切り込みを有していたのに比して、この類型は壇底の小口壁に平行して数cmの切り込みを持っているところに



第32図 土 塚 墓 D8

ある。これらも木板を小口壁に立てた痕跡として把握されよう。それと同時に又個壁、小口壁とを間わすして炭化物の付着が認められているところから、先述第28図の例証の類推結果と同様の事が考えられよう。なお、土塚墓D13には人骨大脳部？を炭化した状態で検出している。

D8は先述D13・D16に比して相違点をあげれば、土塚の壁上部に幅10cm内外の平行する粘土帯を上げることができる。その粘土の下部には壁にそって、弥生式時代前期末に比定されるところの打ち欠かれた金海式腹形土器口縁の破片を検出している。粘土帯の意味するところはこの土塚墓の性格、又その土器片の存在意義を考える上において重要である。粘土に一線を構える木板を想定することは飛躍であろうか。木板を土塚壁と間隔をおいて平行に構え、その間隙にある程度の土を埋め込み、その後粘土を裏込めとして使用したのではないだろうか。その想定が正当視されたとした場合、金海式土器の口縁部破片が即ち、この土塚墓の構築年代を決定する遺物と判断することは避けるべきであろう。先学諸兄の教示を得られれば幸いである。

V 金隈人骨について

我が國の弥生式時代人骨の出土資料は、葬法や埋葬地の土質の関係からと思われるが、西南日本で比較的多く得られていて分布に偏りが見られる。今までに一遺跡から多数の人骨が得られた例としては、佐賀県三津水田、福岡県立岩などの斂棺埋葬人骨、山口県上井ヶ浜の砂丘埋葬人骨などがあげられる。

ところで、朝鮮半島に最も近く、大陸系文化流入の窓口として、ひいては我国弥生式文化の開花を考える上に重要な遺物を今まで出土して来ている九州の西北及び北沿海の当時の人のことは如何なる形質の保持者であったか。福岡平野の人骨は是非とも良く調査研究すべき地理的、時代的重要性をもつものと考えねばならない。今までにもこの平野で、特に須玖遺跡を中心とした筑紫郡春日町一帯からの出土例があるにはあるが、骨質の保存は良好とは言えず統計的処理が一遺跡について可能なほど例数がまとまっていない。

この金隈遺跡は、那珂川をはさんで須玖遺跡の対岸にあり、時代的にもそれと併行し、福岡平野の中心部に南から突出した丘陵地帯の西麓にある。埋葬用大型斂棺の製作技術が頂点にいたらんとする時期の壺を使用し、化粧岩はいらん土壤の好排水も幸いしてか、人骨の残りは頗る良好である。真に、これで2千年の歳月を幽暗の地下に過ごした遺骸とは思えぬほど完全なものが出土する。その好例はK79人骨（第35図1）で、これは今後も全国で屈指の弥生式時代人骨として機会あるごとにあげられるであろう。

また、同様の理由で、他の遺跡では大抵消滅してしまっている幼小児人骨が比較的よく残っていることもこの遺跡の貴重さを増している。好例はK80人骨（第36図）である。一般に人骨についての死亡年命の齧歿結果は、若ければ若いほど信頼性が高い。それは乳歛・永久歯の崩出、交替という恰好の指標が存在することも助けとなっているが、現在までの金隈出土例を一応表示（表貞29）ただけでも、当時の死亡曲線の大勢がうかがえる。幼児期に一つのピークがあり（乳歛は骨が消滅して表に現われて来ぬことが考えられる）、成人してからは男が女より早逝したらしい。

人骨の保存の良いことは、これを内蔵する斂棺形態の今後の精査結果と照合して、当時の埋葬習俗の推移に関してより精細な知見を加えてくれよう。

また、身長は主として大腿骨最大長より推算したが、男性5例（最少154.1cm最大165.5cm）の平均159.8cm、女性10例（最小146.8cm最大154.6cm）の平均150.2cmで、従来の弥生式時代人の身長（土井ヶ浜163.62cm、三津水田161.98cm）に比すればやや低い。これが、従来出土遺品に富む対岸の須玖周辺遺跡に対して、この遺跡では斂棺以外めばしい遺品を伴なわぬことも考え併せてこの地の生活環境が劣悪であったと推論してよいものかどうか今後よく考察をめぐらすべき問題と思う。

なお、最後に付記したいことは、抜歯風習の痕跡である。我が國の縄文式時代の後・晩期に盛行したこの風習が、弥生式時代にいたって衰退の傾向がみられるが、中国地方の日本海沿岸や、九州の離島あたりにはこの時代においても根強く存続していることが知られている。北部九州の斂棺埋葬人骨には従来これと書いた確実な抜歯例を見なかつたので、大陸系文化流入とともに、いち早く消滅したかと考えていたが、金隈K89人骨（女性・熟年 第35図2）を実見するに及んで始めて好例を

得た。それにしてもこの遺跡出土人骨にわずか一例である。K89甕棺は弥生式時代中期初頭の汲田式と見られるので、およそその頃に北部九州の拔歯風習の終末期があったのではないかとの予測をつける貴重な例と思う。



第33図 甕棺墓 K61出土人骨（男性成年）

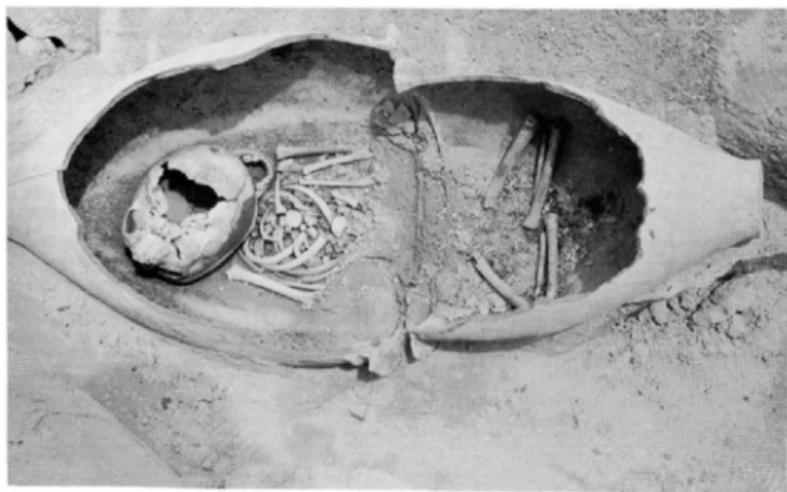


第34図 甕棺墓 K32出土人骨（女性成年）



第35図 1 銀棺墓 K79 出土人骨（成年男性一頭骨）

2 K89 抜歯の認められる人骨（熟年女性一頭骨）



第36図 銀棺墓 K80 出土人骨（幼児）

金隈出土人骨

保存状態
 (◎) 良好
 (○) 良好
 (△) 不良
 (●) 不良部分の残存

墓棺番号	性	年令	保存状態	埋葬姿勢	身長 cm	抜歯	備考
K 1	女	熟年	(●)	不 明	不明	無	
K 5	男	熟年	(●)	不 明	152.7	不明	
K 9	女	成年	(●)	不 明	不明	不明	
K 12	不明	小兒	(●)	不 明	不	無	8才ぐらい
K 13	不明	成年	(○)	仰臥屈葬	165.5	無	
K 14	不明	幼児	(●)	不 明	不	無	4乃至5才
K 15	不明	幼児	(●)	不 明	不	無	2乃至3才
K 19	女	熟年	(●)	(仰臥屈葬)	不明	不明	
K 22	女	成年	(●)	不 明	不	不明	
K 23	不明	成年	(●)	不 明	不	不明	
K 29	女	熟年	(○)	仰臥屈葬	149.8	無	
K 31	女	熟年	(△)	仰臥屈葬	151.1	無	
K 32	女	熟年	(△)	仰臥屈葬	154.6	無	
K 35	女	成年	(○)	仰臥屈葬	154.1	無	
K 43	女	老年	(●)	仰臥屈葬	148.7	不明	
K 61	女	成年	(○)	仰臥屈葬	159.6	無	
K 63	不明	乳児	(●)	不 明	不	不明	1才未満
K 65	女	成年	(○)	仰臥屈葬	146.8	無	
K 69	不明	幼児	(●)	不 明	不	無	3才ぐらい
K 72	女	熟年	(○)	仰臥屈葬	149.7	無	
K 73	女	熟年	(●)	仰臥屈葬	≤ 157.0	不明	身長157cmを下らず
K 77	不明	幼児	(●)	不 明	不	無	4乃至5才
K 79	女	成年	(●)	仰臥屈葬	163.0	無	
K 80	不明	幼児	(○)	仰臥屈葬	不	無	4才ぐらい
K 83	女	熟年	(○)	仰臥屈葬	150.0	無	
K 84	不明	幼児	(●)	仰臥屈葬	不	明	5才ぐらい
K 85	女	成年	(●)	仰臥屈葬	148.9	不明	
K 86	不明	幼年	(○)	仰臥屈葬	不	無	18±3月
K 89	女	熟年	(○)	仰臥屈葬	149.3	有	上顎両側大歯の風習的抜去歴あり。
D 3	(女)	成人	(●)	不 明	不	不明	脛を立てた仰臥屈葬か。
D 10	(女)	成年	(●)	不 明	不	不明	
D 14	不明	成人	(●)	不 明	不	不明	

死 亡 年 令 (墓棺出土人骨)

満年令	1	6	12	20	40	60	計	
	乳児	幼児	小児	若年	成年	熟年		
男 性				•••••	••		8	
女 性					••	••••	•	11
不 明	•	•••••	•		•			10
計	1	7	1		9	10	1	29

VI 本遺跡の提起せる問題点

おわりに金隈遺跡の問題点を整理・総括することにより、本遺跡の再調査に備えたい。

本年度の調査で、金隈共同墓地が使用された期間は弥生式時代前期末(西歴紀元前約170年?)から弥生式時代中期(西歴約100年?)全般に亘る期間である。即ち、本遺跡で現在まで調査認識した最も古い型式は弥生式時代前期終末のいわゆる金海式土器であり、最も新しい型式は中期後葉立岩式土器である。ここで問題になるのは土器型式編年上の問題である。今まで北九州地域における弥生式時代墓館の編年⁽¹⁾は把握されているものの、それに小形墓館の編年は未だなされていないらしい。その点を踏まえた上で、本遺跡の密接せる墓館墓の先後新旧関係を示す切り合は關係は編年上極めて重大な要素を秘めていると言えよう(第37図に一応の編年を試みた)。

編年上の問題は次に如何なる問題に波及するか。直接的には、歴史的時間の流れに沿って、一共同体内部で時代別に人口数の増減の状態を把握することになるであろうし、換言するなら一時代一型式にどの位の世代数が考えられ、どの位の人口を有するのかという問題点が生じるであろう。幸いにして、弥生式時代墓館共同墓地内に於いて単一家族四世代位が把握された例は勇氣づけられる。それら人口の増減は繩文式時代の採集経済に勇氣ある惜別を告げ、新しき農耕経済を自らの生産として変革させた弥生式時代人の逞しい労働的経験より必然的に生じる発展段階的生産技術の革新、それに基く労働人口の必要性、それに基く生まれる余剰物の増進、その余剰物がもたらすところの階級発生への道程等が、常に関連性ある前提として考えられなければならない事は言うまでもない。

北九州地方の弥生式時代に、非常に顕著な特徴として認められる墓館墓は、果して何時頃わが国における当時の先進的役割の中で、地域的特殊性を有しながら確立したのか。その問題は弥生式時代黎明期の稻作導入が繩文式時代の範疇で築かれた人間社会を根底から振り動かす要因になったとは言え、それは社会構造全体を変革させたものではなかったと把握されている以上、極めて重要な鍵を握っていると考える。換言するなら、稻作の導入により徹底された社会構造の変革、即ち上部構造と下部構造の同時的変革とは言い難いのなら、稻作農耕生産という利害状況によって動かされる人間は、何時の時期に繩文式時代に培われた統合的な文化を変革させたのであろうかという問題と関連して、金隈遺跡の墓館墓制の消長の過程即ち「墓館墓制確立への過程」「墓館墓制の確立」「墓館墓制の衰退」を明確に把握することは、無意味な作業ではない。

その問題にアプローチする方法として、墓館墓制の出現する当初からその姿を使用される壺形土器、罐形土器の関係を、墓館墓制の中で密に観察することも重要であろうし、また墓館墓の数の増減も問題となるであろう。金隈遺跡の本調査で辿られる墓館墓制に使用された壺形土器と壺形土器の変遷を概観すると、金海式土器から観察できる。併し、これは未調査ゆえ何とも言ひ難いが、本遺跡の起源としてあげられる形式である。

墓館用大形壺形土器を見ていく。

墓館用大形壺形土器は、前期末金海式期より始まり、中期後葉立岩式期まで至る。今まで認められる型式は金海式土器、汲田式土器、須炊式土器、立岩式土器である。前期中葉板付II式的生活用式の壺が棺として使用されている場合、その口縁が焼成後の打ち欠きであるのを考えるにつ

け、壺棺用大形變形土器の出現は埋葬に対する人々の通念に何らかの相違を見出させ、更に又、生活の具として存在した變形土器が葬祭具として生活から遊離した基底で、定着化し始めると考えられる。何故なら煮沸形態として存在していた變形土器から埋葬用形態への脱皮は、更にそれが大形變形土器製作上の技術的革新として大きな意味をもたらしているからである。即ち稻作生産と密接にかかわる生活技術の一環として生じた土器製作技術が、当時の人々の社会慣習の一部を表現していると思われる葬制への浸透を物語っているからである。

壺棺用小形變形土器を見ていく。

壺棺用小形變形土器の出現は本遺跡では、中期最初頃城ノ越式期(第37図3)からあり前期に見られた壺棺用小形壺形土器からの転換が始まられている。併し、城ノ越式湖の壺棺用小形變形土器の表面には第二次焼成時の煤が付着し、未だ煮沸形態として生活に使用されたものを壺棺に転化しているに過ぎず、大形變形土器で城ノ越式期の次の段階に纏年された後田式期併行に比定されると考える壺棺用小形變形土器(第37図9・10)には第二次焼成時の煤の付着はみられず、「飾られぬ汚き土器」から「飾られた美しい土器」への転化を表現し始め、煮沸形態から脱皮を計り、上器製作技術が壺棺用小形變形土器にまで独立し始めたことを意味する。壺棺用小形變形土器は後田式期から須歎式期になって煮沸形態の表現として用いられた「飾られぬ汚き土器」の表現からの完全なる転化として「飾られた美しい土器」(第37図14)の表現を使用するに遅わない小形變形土器の土器製作技術として完全に独立する。⁽¹⁾

壺形用小形壺形土器を見ていく。

本遺跡で、小児用壺棺としてその萌芽を見る壺棺は須歎式期まで継続され、或いは生産用具「貯藏用形態」としての姿をとどめながら、或いは磨研され、棺用に直接製作された技術を具備しながらも未だ口縁部の打ち欠きを継承し、或いは供獻用形態として使用されながら(第37図2.4-7)、混然とした状態を呈し、未だ生活用具「貯藏用形態」から完全に抜け出しえぬものを感じさせる。更には先述の壺棺用小形變形土器の浸透を汲出式前期(第37図10)になって受け入れ、真に埋葬用形態として完全なる姿を表現するのは須歎式期に(第37図14)になってからである。

以上の事実観察を総括すると、稻作農耕生産から派生するところの生活用具の變形土器、變形七器を必然的に、人々に対して製作使用させたが、その生活用具がその一部を転化して埋葬用棺となり、更に土器製作技術をも転化してしまう。その判然とした状態は厳密に、完全に埋葬用土器として定着するのは須歎式期である。それを、利害状況から醸成された生活用具の壺、變形土器が社会風習の一部として存在した理據にまで浸透したという事実は、下部構造、上部構造の完全なる一致として把握され、縄文式時代からひきつがれた弥生式時代の社会構造を完全に農耕社会成立の時点として把えることは不可能だろうか………。

金隈遺跡における壺棺墓の変遷を他の土塚墓、石棺墓、支石墓らしき巨石等との関連として見て行きたい。厳密な分析を未だ行なっていない段階で述べる事は時期尚早と考えられるが、将来の再調査を期す気持ちもあって、概観を申し述べ、金隈遺跡の問題点としたい。城ノ越式期において、小形小児用壺、壺棺はそれぞれ存在するが、大形成人用壺棺の存在は認められない。後田式期になって、成人、小児を問わず、かなりの数量を認め、更に須歎期になってその量的にも分布の範囲においても、一瞥をくれるだけで顕著に目につくところから、壺棺墓の葬法は本遺跡

においてその全盛を迎えたと感じられる。そして立岩式期になって謫棺墓制はその減少の末路を辿るのみの状態を呈している。

その「謫棺墓制確立への過程」と「謫棺墓制の衰退への道」の時期に謫棺墓制に変わる墓制の転用は当然考えられねばなるまい。「謫棺墓制確立への過程」には「IV 遺跡の概要」で述べたとおり、土塚墓は土塚墓と謫棺墓の関係で全て謫棺墓に切られている状態を現出し、古くは城ノ越式小児用謫棺墓に切られているところから、城ノ越式期まで土塚墓が併行して行なわれていたのかも知れない。

又「謫棺墓制の衰退への道」は社会的背景として、謫棺墓制に新たな墓制の出現を考えられる。それが石棺であったのか、支石墓らしき巨石？に表現されているのか、如何とも言い難い。弥生式時代中期になって、社会的生産技術的交流が頻繁に行なわれた現象は把えられているし、共同体はその閉鎖された姿の殻を開き、地域社会的交流なくしては存在し得ぬ状態を呈する。そこに社会的交流権を支配する族長の人間の出現が考えられ、外部的要因によって内部的要因の徐々なる変化を強いられる時期が謫棺の減少し始める立岩式期（須玖式期も含まれると考える）によって集約され、被葬者の共同体内部における身分的地位を露骨に表現し始める時期にきているのではなかろうか。そのような意味において人骨の保存状態の良好さは何らかの身分的格差、例えば、年令差、男女の別、小児と成人との格差など、基本的問題を考える上に最も重要な材料を提供するであろう。

更に、御笠川を隔てて存在する須玖岡本遺跡を中心に考えられる弥生式時代に特異な社会的権威を象徴する共同体に、本遺跡に抽象される共同体が吸収された存在か否か、未だ調査の完全でない時期に考えるは尚早と言わねばならないし、はたまた本遺跡を含む月隈丘陵一帯は、未開拓の部分であるので、結論は他日に譲ることにする。

参考文献

- (1) 森貞次郎「弥生時代における鉄形鋼劍の流入について」—金閣文大博士記念論文集「日本文化と南方文化」所収 1968年
- (2) 原田大八「福岡縣石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」考古学雑誌第38巻第4号 1962年
- (3) 小林行雄「先史考古学における様式問題」考古学第4巻第8号 1933年
森木六爾「弥生式土器における二者」考古学第5卷第1号 1934年
森木六爾「時流形態と煮沸形態」考古学評論第1巻第1号 1934年
小林行雄「弥生式土器の様式病変」考古学評論第1巻第2号 1933年
森木六爾、小林行雄「弥生式土器聚成図録」1938年
(変形土器と瘤形土器の本質に接近する方法として)
- (4) 藤田等「農業の開始と發展」私たちの考古学 1955年
- (5) 児島隆人「立岩」1960年、前掲古「須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群」

金隈遺跡

昭和 45 年 3 月 31 日 発行

発行・編集 福岡市教育委員会
印 刷 青柳工業株式会社